

日本キリスト教会大阪北教会

2016年8月28日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書12:36~43

12:36b イエスはこれらのことを話してから、立ち去って彼らから身を隠された。  
12:37 このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを信じなかった。12:38 預言者イザヤの言葉が実現するためであった。彼はこう言っている。「主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか。」12:39 彼らが信じることができなかった理由を、イザヤはまた次のように言っている。12:40「神は彼らの目を見えなくし、その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。」12:41 イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである。12:42 とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言い表さなかった。12:43 彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである。

《説教》『神からの誉れか、人からの誉れか』

◆週報に記されていますように、私たちの愛する丹後のぶ子姉が去る21日に召され、水曜日に葬儀をし、神様の御許にお送りしました。会堂いっぱいの方で、式次第を100部用意しましたが足りませんでした。葬儀を通して私は強く感じたことは、丹後姉が残された愛唱聖句と愛唱讃美歌でした。愛唱聖句はイザヤ書41章9~10節でした。「わたしはあなたを固くとらえ 地の果て、その隅々から呼び出して言った。あなたはわたしの僕、わたしはあなたを選び、決して見捨てない。恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神、勢いを与えてあなたを助け、わたしの救いの右の手であなたをささえる。」愛唱讃美歌は旧讃美歌の520番と482番でした。これらを通して、神様の真実を新たに覚えました。聖書の御言葉は悉く真実なのだ、ということを経験を通して、私達は強く思い知ることができました。これ以上ない信仰の遺産を、姉妹は私たちに残してくれました。あとは、私たちがこの信仰の遺産を活用することだと思いますね。

◆私たちはヨハネ福音書を続けて読んでまいりました。どこも分かりやすいということにはなかったと思います。これからもそうでしょう。しかし、私たちがその御言葉を理解できる時を神様は備えてくださると思います。それで今日の箇所がありますが、41節にこうあります。「イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである」と。これは難しい表現ではありませんが、何を言っているのかを理解するのは、簡単ではありません。預言者イザヤは紀元前8世紀の人です。聖書の中でイザヤ書66章が一番分量の多い預言書だと思います。その紀元前8世紀の預言者が「イエスの栄光を見た」と書いてあるわけです。イエス様より800年近く前の預言者が「イエス様の栄光を見た」と書いてあるわけです。このことの事情を私たちは今日の箇所を通して知りたいのであります。

◆40 節にこうあります。「神は彼らの目を見えなくし、その心をかたくなにされた。こうして彼らは目で見ることなく、心で悟らず 立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない」と。これはイザヤ書 6 章からの引用です。もう一つ、38 節にこうあります。「預言者イザヤの言葉が実現するためであった。彼はこう言っている。『主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか。』」これはイザヤ書 53 章「苦難の僕」からの引用です。イザヤ書 40～55 章を「第二イザヤ」と呼びます。1～39 章と時代状況が違うのでそう呼ばれています。53 章「苦難の僕」の冒頭部分を読んでみたいと思います。「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるろうか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、かれが打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」ここに描かれている無名の預言者・「苦難の僕」がいたのです。そしてこれは、イエス様についての予言なのだというふうに教会は読んで来ました。

◆それでイザヤ書 1 章～39 章までの本来のイザヤ書の時代のイスラエルはどうであったか。神の祝福を世界にもたらしめべき使命を与えられて選ばれたイスラエルの民は、アブラハムの時代にその腐敗、墮落の故に滅ぼされたソドムとゴムラの腐敗墮落よりも、更にひどい状態にあったのです。そのようなイスラエルに対する神の裁きが下って、やがてそのイスラエルも、裁かれてバビロニア帝国によって滅ぼされ、バビロンに捕囚の身になります。そのバビロン捕囚期の預言者が、イザヤ書 53 章の「苦難の僕」なのであります。私たちはこのイザヤ書 53 章はしばしば読む必要があると思う聖書の箇所です。

◆私達の教会が行なっている「炊き出し」のきっかけになった一人の牧師さんがいます。西成教会の金井愛明牧師です。ある事で始めてお会いした時のことです。金井牧師は、「私は、聖書は、イザヤ書 53 章があれば、それで十分だと思っています」と言われたのです。そして涙をぼろぼろ流されました。先生が、同志社の商学部で在学していた、ある年の夏休みに、先生の弟さんが、何の書置きも残さないで自死するのです。警察から知らせを受けて遺体を引き取りに行かれます。そんな事があって先生は商学部から神学部に移り、牧師になられたのでした。自分の弟が自死するほどの苦悩の中にあっても関わらず、兄である自分がそれに全く気付かなかったことを深く悔いておられるのが分かりました。イザヤ書 53 章の苦難の僕は、民の負い切れない負い目の責めを代わって負い、罪の民にいやしをもたらすのです。金井先生はイザヤ書 53 章の「苦難の僕」に十字架のキリストを見出されたのです。

◆それで41節の「イザヤはイエスの栄光を見た」ということですが、それは、主イエスが、イスラエルの罪を代わって負い、正道に戻す、民を救うイエス様をイザヤが見たということになります。つまりその罪ゆえに滅亡したイスラエルの回復、再生を語る預言者が第二イザヤと言われる苦難の僕であります。先ほど申しましたように「イザヤ」という名は「神の救い」を意味します。そういう意味の名前を持った預言者であります。上で申しましたがイザヤは紀元前8世紀の預言者です。第二イザヤは紀元前6世紀の預言者ですから、イエス様の栄光を見るということは、実際はあり得ないことです。しかし、私達の信じる神様は時代を超越しておられます。わたしたちの信仰も時を超越しています。今ここにいるわたしたちは、過去にも戻るし、未来にも行くし、そして今ここにいるわけですが、そういう意味において時を超越しています。

◆例えば、この新会堂ができてからは、生駒の教会墓地に行く機会が少なくなっていますが、教会墓地の墓石には黙示録1章4節の言葉が刻まれています。それは、「今いまし、昔いまし、やがて来るべき方」という御言葉です。今ここにいます御方は、昔おられたお方であり、やがてこられる御方です。その御方がこの墓に眠る者たちとも常に共にいますとの信仰です。この主旨でこの御言葉が選ばれたのです。この会堂も来年2月で10年になりますが、玄関の定礎板に、「主が備えてくださる。ヤハウエ・イルエ」と刻まれています。これは創世記22章14節にあるアブラハムの言葉です。この言葉に示されたアブラハムの信仰を私たちアブラハムと共有しているわけです。正にアブラハムに代表されると言ってもいいイスラエルの民の信仰、それは旧約聖書に記されておりますけれども、それは私たちの信仰でもあるということでもあります。この言葉は、主なる神様は、全ての事柄を御覧になっておられ、これは絶対に、今・ここで必要だとみなされた時には、神様はどんな事をしてでも備えて下さる御方であるということです。

◆「イザヤはイエスの栄光を見た」というのは、かつての日、かつて、イスラエルとイザヤに現れなされた神様が、今・此処でイエス様において現臨しておられるということ、ヨハネは言っているわけです。そしてかつての日、イスラエルの再生された神様が、今・ここにイエス様において臨在され、死んだラザロをよみがえらせ給うた。どういうことかと言いますと、イエス様が創造者であられ、死を命に変え給う御方であられる。歴史を支配し導かれる神ご自身がイエス様なのだということ、「イザヤがイエスの栄光を見た」という表現において表しているのです。イエス様が正に苦難の僕そのものであられ、罪びとの救いのために全身全霊を捧げ切ってください御方であられる。このイエス様こそ生ける神様であられる。そういう信仰であります。ですから聖書の神様は、イザヤが信じ、アブラハムが信じ、そして私たちが信じているこの聖書の神様は本当に愛と力に満ち給うお方であります。

◆そういうイエス様の栄光を多くのイスラエルの民が目撃したわけですね。41節以下にこうあります。「12:41 イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである。 12:42 とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者

は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかりて公に言い表さなかった。12:43 彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」と。ですから、イエス様に人並以上の存在を、神様が遣わしてくださった存在を認める人は多かったのです。けれども神様が人間になったということは、イスラエルの民にとっては、つまりき以外のなにものでもありません。ですから「イエスは主なり」と告白できなかつたのですね。

◆「12:43 彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである。」この部分の訳は、口語訳がより良いと思います。「彼らは神の栄光よりも、人の栄光を好んだからである。「神からの誉れ」ではなくて「神の誉れ」です。この「誉れ」という言葉は「栄光」と同じです。「彼らは神の栄光よりも人間の栄光を愛したからである。」これが一番の直訳です。つまり神の栄光よりも人間の栄光を愛する。人間の栄光に固執するのです。「苦難の僕」としてわたしたちに代わって償いをしてくださる神様というのは、イスラエル人にはどんなに考えても辿り着けない。そのようなことがここに書かれてあります。

◆そのようなことでありまして、わたしたちも預言者イザヤと同じくイエス様の栄光を知る者とされております。その私たちが、このイスラエルの人々にまさって、主イエス様を信頼し、イエス様が本当に私たちに代わって罪の償いを成し遂げてくださる御方として、誰にも憚らないで、われらの主、創り主として、信じて歩んでまいりたいと思います。イエス様は11章25節でこう言われました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない。」イエス様を信じること、それがイエス様に栄光を帰することになるわけですが、この信仰には、何ものによっても奪い取られることのない命が宿っているのです。イスラエルの民が越えられなかった、このような信仰にわたしたちは引き入れられているわけです。これは神様の恵み以外の何ものでもありません。そのことをもう一度確認し、この信仰を、信仰の遺産を本当に活用して生きる。そして主イエス様に従う。それが私たちに求められている信仰の道だと思います。

#### ◆お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

わたしたちはこの世の栄光に強く捉われていて、あなたが私たちの為に身を捨て、与えて下さる御栄光のことがよく分からないでいる者でありますけれども、このような者を憐れみ、この信仰の幸いに導き入れられていることを、新たに覚え、心から感謝いたします。あなたのご栄光を日々仰ぎ見つつ、御栄えの現れることを願いつつ、信仰から信仰へと歩ませてください。

この祈り主イエス・キリストの御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。